

新型インフルエンザが猛威をふるっている。患者数が増えるにわたがって、いくつかがわかってきた。たとえば、若者の罹患（りかん）率が高いこと、健康な人が感染しても致死率は高くないこと、感染初期の段階ではタミフルやリレンザの効果があること、などである。

当初は「新型」ということで恐怖があったが、今では従来型のイ

## 新型インフルエンザ

ンフルエンザと同じレベルの対応でよい、という認識まで落ち着いてきた。いまから振り返ると、当初の政府やマスコミの反応は過剰反応ではないか、と思われるものもある。

これからも、強毒性の変異型が現れるなど思わぬ方向に展開するリスクには注意しつつも、罹患率が低い大人の活動は平常に戻すべきであろう。また、リスクをゼロにすることは事実上不可能であるので、蔓延（まんえん）地域にいくことは、その理由・効果とリスク

東京大教授

伊藤 隆敏

を天秤（てんびん）にかけて決断すべきである。ただし、感染力があるということは他人への「負の外部性」を考慮すべきではある。効果とリスクを熟慮



高校に非難が寄せられているという報道があったが、これでは高校や参加学生がかわいそうだ。参加の貴重な体験は感染リスクを上回るのではないか。同様の判断で参加した高校は他にもある。

新型インフルエンザにおびえる前に、先進国では常識の麻疹（ましん）、おたふく風邪、風疹の予防接種を徹底することが先ではないか。ごく少数の副作用のために予防接種を強く推奨しないというのでは効果とリスクの計算ができてない。

の上、感染地域の仕事やイベントに参加した結果感染者を出したとしても、必ずしも非難されるべきではない。模擬国連に参加して感染者が出た川崎市の